

[エッセイ]

「売店の話」：精神医療を「わたしのことば」で綴る

大野 美子(大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程)

「売店の話」

病院の売店がすきです。限られたスペースに必要な最小限のものだけがぎゅっと詰まっているのがすき。外の世界を想像しながら今ここにある時間を慎ましやかに過ごす人たち。病院に行くと必ず売店に寄って、店内をたしかめるように幾周も歩いてしまう。それから、ドラマでも観るように、立ち入る人たちらを眺めてしまう。

見たことのないゼリーが透明を輝かせてお行儀よく並んでいる。ウィッグや毛糸の帽子にどきりとして思わず目をそらしてしまう。雑誌コーナーではページがゆっくりめくられる。案外、旅雑誌が多いのが特徴で、何度もめくってはいつかの紅葉を思いだし、世界一周だってできてしまう。お昼を過ぎると半額のお弁当に客が集まり、両手に取ったパックを各自が用心深く見比べる。広めの通路には、点滴の塔が高くそびえる車椅子。ストライプのパジャマ姿の男の子がお母さんを見あげている。カーディガンを肩にかけた女性が、レターセットを手に取りレジへと歩きだす。彼女はきっと今日三度目の売店なのだろう。

かつて、私にも、売店が世界のすべてだった歳月があった。二十代の終わり、山奥の療養所の話だ。最初は廊下の隅っこにある小さな売店だった。段ボールをくりぬいただけのボックスに袋菓子が詰め込まれている。薄暗い奥の方に座るおばあさんは滅多に動かず、レジスターがチンと音を立てるのだ。冷凍庫のガラス戸を覗くと霜がびっしりついていて、バニラアイスのカップはかちかちだった。

うつらうつらと過ごす部屋で、細く開いた窓から風が入ってカーテンを揺らしていた。眠りから起こされて流し込む食事は、摂取量を尋ねられるといつも無難に「七割」と答えた。暗いニュースを見たくないからと誰かが言い出して、夕食時は「おじゃる丸」が低い音量で流れていた。採血の朝は、足音で看護師さんを言い当てた。血管が細い私の腕は、トンボ針を使っても紫色が沈んだ。

入院してしばらく慣れた頃、売店でみりん揚げの割れせんばかりを詰めた百円の袋菓子を見つけた。ときおり駆られるようにこのお菓子が食べたくなくて、小さながま口を握りしめて足早に廊下を進んだ。甘辛くて脂っばい味とほどよい硬さの歯ごたえは、退屈をやり過ごすのにぴったりで、每日一袋開けていたら痩せ細った身体が数か月で肉を戻した。

ハツミちゃんは憧れの航空会社に派遣されたものの、吐き気が止まらなくなって半年で退職。電車を乗り継いで山の病院へひとりやってきた。サキちゃんから警官だったと聞いたとき、私たちはにわか信じられずに冗談か作り話と思っていた。ちっとも本気にしない私たちにサキちゃんは白バイにまたがる写真を見せたものだ。長身のカズキくんは学校でひどいいじめに遭ったのだと誰かが教えてくれた。暴力から逃れて一緒に入院していた母娘ふたりは病室が別々だった。時おり病院の奥に

ある養護学校に行った。みんなで黒いグランドピアノの下にもぐって、身体に振動を感じながら演奏を聴いた。誰かが病院から逃げだしたとしても、麓まで下りる前に追いかけてきた看護師さんに見つかって連れ戻されていた。

夏は玄関から町の灯や遠くの花火を眺めた。秋は裏口から外廊下を歩き、室内履きのまま森を抜けた。踏みしめる足裏が少し沈んで、落ち葉はかさかさ音を立てた。真冬はなぜだか早く目覚めて、日の出の時間を測った。食堂で水筒に入れたお茶は熱くて口にできず、湯気が頬を温める。白い息だけが私の存在を物語っていた。春は霞んではるか遠く山向こうにあるとのことだった。

退院する仲間を横目に私の入院は一年をすぎ、病棟の改装に伴って売店はヤマザキのお店に替わった。午後三時。寝息に耳を澄ましながらか注意深くカーテンを開けて、そろりと廊下にでる。A病棟の入口を左に曲がって、喫煙室の横の暗い廊下を進むと外来棟にでる。からっぽのソファの間を玄関の手前まで進んだら、右に折れて診察室を三つ越えると自動ドアがある。その先がヤマザキの店。病院の建物に続く形で建ったその店は、町中にあふれるコンビニエンスストアを半分にしたサイズで、レジ横のガラスケースに並ぶパイシューをひとつ買っては、白いパン皿がもらえるシールを集めた。

茶色の紙袋を大事に抱えてA病棟に戻る。廊下に誰もいないのを確かめて足早に部屋へと戻り、カーテンの中に入る。手をふいて、袋をあけて、さあ食べよう、というまさにそのとき、薄く開いた病室の扉から囁くような呼び声が聞こえるのだ。「ヨーシーコちゃん」あーあ。また見つかった。サツキだ。十歳年下の彼女を私は仕方なくベッドに招き入れる。そして、パイシューを慎重にふたつに割って、左手と右手を素早く吟味し、少し小さい方を彼女にさしだす。「いいの?」「いいよ。おなかあまりすいてないから」「うれしい。ありがとう」そんなお決まりのやりとりを重ねて、私たちはパイシューを分けあって平らげた。「シュークリームだけ食べてるとおしっこが甘い匂いになるの知ってる?」と上目遣いで彼女は言った。

そんな日が来る日も来る日も、翌月も翌年もつづいた。サツキは午後の数時間を除いて鍵のかかった部屋にいて、病棟から外へでることを許されていなかった。彼女を見舞いに来る人は誰もいなかった。

あるとき、病棟で騒動が起きたことがあった。冷蔵庫に大事に冷やしておいたおやつがなくなってしまうのだから大騒動だ。各自は売店に行くと、食堂の冷蔵庫のドアにぶらさげている黒いマジックで、自分の名前をおやつに記して冷蔵庫に入れた。プリンやヨーグルト、ときに、袋に入ったパイシューだった。「名前を書いておいたのになくなった」とみんなは口々に言った。週に数度もプリンを食べられてしまった子もいた。入院中のみんなにとって売店はほとんど唯一の楽しみで、冷蔵庫にしまったおやつを食べられてしまうことは、とても悔しいことだったと思う。病棟は大騒ぎになり、犯人をめぐって噂が飛び交った。黙っていたけど、私には犯人の目星がついていた。私の名前のおやつだけは決してなくなることがなかったから。

売店が世界のすべてだった頃の話。

あの日と同じ病棟と一緒に入院していた仲間のうち、何人かはこの世を去ってしまった。何人かは退院後も連絡を取りあったが次第に疎遠になった。今でも携帯のアドレスブックに番号があるけれど、この先話すことはないだろう。サツキだけはまだ一応連絡を取りあえる仲だ。数年に一度のことだけれど。私が引っ越すたびに、なぜだか彼女が連絡をくれて新しい住所を知らせあうのだ。彼女はたくましく、二児の母となった。

「売店の話」について:精神医療を「わたしのことば」で綴る

病院の売店を訪れるたび、惹かれる理由をいつか書きたいと思ってきた。二十年の歳月を要したが、書き始めるとあの季節や出逢った人々が私を再訪して、短い物語ができあがった。(物語は私の経験に基づくが、プライバシーに配慮して改変を加えた。)

私は収容型の精神医療の末裔だ。「末裔」というのは、入院中心の医療は終わりにして、精神疾患を抱えた人が地域で安心して暮らせる社会となるよう願うからだ。二十代の入院経験を小箱に入れて蓋をして、私はメンタルヘルス専門職となった。メンタル不調を抱えた人が、コミュニティから切り離されず人の中で癒えていけるように。精神医療を心地よく使える人が少しでも増えるように。人が傷や悲しみすら愛おしみながら、いのちを慈しんで生きる姿は美しい。それを見るのが好きだった。

がむしゃらに地域を駆け回って実践に励み、ふと、私は立ちどまった。理論と専門用語を用いて目の前の人を記述する態度や、便利で素早く流通する言葉に、食傷していた。精神医学、心理学、社会福祉学などの理論には、「正常／健康／成長／回復／自立」をよしとする規範が入り込んでいる。それらの規範が私には息苦しく感じられた。鎧を脱いで、哲学という杖を片手に、もう一度歩み直してみようと思った。目下、精進中の身である。

しかし、研究の言葉は固いのだ。筋の通ったことしか言えないのだ。専門用語を使えば話はクリアになるが、真実はもっと曖昧で複雑で、一筋縄でないのだ。うまく表現できずもどかしさを抱いた私は、文学の力を信じて、詩とエッセイを書き始めた。

たしかに嫌なことがたくさんあった。取り返しのつかないできごと。もう帰らぬ人も。しかし書いていると、想い出がひらひらと舞い下りるから、欠片を手繰り寄せるようにして綴る。長い間、触れることなく大切にしまわれていた記憶。この世界のどこかにたしかにあったその時間を、横から眺めるようにして描く。「良い医療／悪い医療」に振り分けることなどできないできごと。「成長」や「回復」に集約できない、ささやかで濃密な時間。医師が白衣を脱ぐ瞬間。小さいじわる、静かな抵抗。秘密と連帯。患者を演じる患者たち。もう語ることのできない死者のことばすら拾って、イタコのように私は書く。

そのように紡がれた物語をふうわりたたんで手元に置いておきたい。そのことばを必要とする誰かが現れたとき、そっとさしだせるように。あのときの私が、誰かのことばを糧に日々を生き延びたように。いつか書くことでケアしあう場をつくりたい。そんな野望すら生まれる。

おそらく、精神医療改革は、誰かを敵に見立てて批判するだけでは頑なさを増すばかりで、進んでいかないだろう。システムや形を変えても「そのころ」が変わらなければ、ケアする人もケアを受ける人も呼吸が深く吸えるような営みへと、変わることは困難だろう。だから、心がことりと音を立てて動く瞬間や、月あかりくらいの希望のことを、少しでも共有したいと思う。

ことばはいつも手遅れで、もういない誰かのことを、今はいないあなたに向かって語る。ことばはいつも「そのあと」だから、あたらしい宛先に届く手紙を、あたらしい誰かが読んでいます。願いのような祈りのような「わたしのことば」。